〈総合B〉

「アジアに学ぶ—日本とアジアと私」を担当して

小西　正捷

講義のイメージづくり

いよいよ全学カリキュラムがフル回転し，なかでも「目玉」とされる総合B科目のひとつを，前期だけながら担当することとなった。共通のテーマを設定したうえ，専門領域を異にする複数の教員が常時その場で指導にあたり，学生たちの参加も大いに期待するというこの講義スタイルは，文学部では9学科を横断して，つまり専門領域を越えて設けられた文学部研究センターの「共通科目・集中合同講義」ですでにやってきたことであり，私にも経験のないことではなかった。しかも今回は，「アジア」を問題にするということで，引き受けるしかないか，という気に，ついなってしまったのである。

文学部の「集中合同講義」の経験からすれば，この方式は学生たちに大きなインパクトを与えうるだけでなく，まずなによりも自分自身が他の先生がたの知見や見解から多くを学びうるし，ときにはあえてその見解に異をとなえて学生諸君の面前でホットな議論を展開し，そのこと自体が彼らに「学問する」ということの意味を考えさせたり，またさまざまな学的領域の（あるいは教師による個性的な）相違を学ばせることにもなったからである。

ただし，一種のパフォーマンスとしてであっても，あえて大先輩やオーソドックスかつ「権威」ある，あるいは「常識的」な見解に対してはことごとく議論をふっかけることを学生たちにとっても有効なこと，と考えていたまだ若きころの私は，非礼にも大先生がたに対してかなり挑発的な発言をした結果，少々度が過ぎたか（このようなルールを理解してくださっていたはずの）先生を怒らせてしまい，そのカッカとしたようすは，たちまち彼らがつくった翌朝の壁新聞のスポーツ欄（！）に，「インディアナ・ジョーンズ［インド考古学専攻の私］と［某チャンピオン］のプロレス・デスマッチ」などと，過激なイラスト入りでデカデカと報道されてしまった次第。

この壁新聞は合宿方式の集中講義方式であったからこそできた。彼らが徹夜で仕上げた労作であったから，今も研究センターのどこかに保存されているらしいが，いつかなんとか破棄してもらえないかとも，ひそかに思ってい

る。ただ，考えてみれば，毎週ではあれ教室での90分間の出会いでしかない総合Bでは，このようなものはよくも悪くも生まれないのだ。また，夜も議論や酒で寝かしてくれない，という「全人格的」なつきあいもない。

もう一つの差は，受講生の数である。合宿方式の集中合同講義（AとC）では，宿舎の関係で30～40人程度が限度であったのに対し，総合Bのほうは全学カリキュラム中に位置づけられているため，受講生の数はかなりのものとなることが当初から予測された。集中合同の場合でも，B方式のもののみは泊まりがけでなく，かなりの人数を集めて大学の大教室で行うものだが，私には残念ながらその経験がない。というより，この方式からはこれまでなんとか逃げまくってきたのが本当だ。この大教室恐怖症は，前任校で常時数百人の一般教育講義を14年にもわたって担当していた経験にもよる。

また，受講生がともかく文学部の学生である集中合同ではなく，おそらくその関心のありかたも異なる他学部の学生も集まってくるものであることも，かつてのことが悪夢のように思いだされて，不安であった。かつて非常勤で，それほど数もいない医学部の学生に人類学を教えたことがあるが，ありとあらゆる手を尽くした努力にもかかわらず，まるでコミュニケーションがなりたたなかったため，とうとう席を蹴立てるようにしてやめてしまったこともある。

でもまあ，立教ではどうなのだろう。尊敬する大ベテランの先輩から「教養」授業の大変さを聞いてはいたが，今回は他の先生にもお付き合いいただくことだし，前期だけだし，まっいいか，ひとつ試しにやってみるか，ということでスタートさせざるをえなかったのである。

「アジアを知る」のか「学ぶ」のか

さて，総合Bで与えられたテーマは「アジアを知る」であった。これが全学カリキュラム委員会などで，どのような理念とイメージで具体的に設定されたかは必ずしも詳らかでない。その立案の中心にいた方々が，そろって研究休暇をとってしまわれたからでもある。それにしても，立教のカリキュラムのなかに「アジア」の語のある講義が設けられることはよい。この日本で，まして立教で，ともかく学生諸君にアジアについて知ってほしい，少なくともアジアの社会・文化の一端に触れ，アジアを彼らなりに意識してほしい，という気持ちに偽りはなかった。アグネス・チャンの著作名を借りれば，まさに「アジアが気にならないあなたに」，ということである。

しかし，「アジアを知る」というタイトル自体には抵抗があった。知らないことを知ろうとするのは結構だが，なぜ自分はこれまでアジアを深く知ろうとしてこなかったのか。それを鋭く自らに問いかけるものでない限り，自分たちの方はどこか高みにいて，これ

まであまり考えたこともなかった「遅れた，ダサい」あるいは「どこか神秘的な」アジアのことも知ってやろう，ということにもなりかねない。むろん「大東亜共栄圏」政策期のように，あくまでも日本を利するための知識の植民地主義的収奪であってならないことは当然であるが，せめて今，自分や日本を再発見するためでもいいから，つまりそれがアジア諸国自体にはなんの役にも立たなくとも，むしろアジアを先生として，少なくとも対等の存在として，「そこに学ぶ」という姿勢と発想の大転換がほしかったのである。

「学ぶ」という語につきまとう一種のうさん臭さやイヤらしさもわかっている。しかし，学生諸君とともに真に「アジアに学ぶ」ためには，アジアに身をもって学んできた先生がたに参加していただき，学問上の事だけでなく，なぜアジアなのか，またその生活と研究過程においてどのような苦悩と発見があったのか，そこから見えてくる自分と日本はどのようなものであったのか。それを自らも語り，また他の先生がたから伺うことは，ディレクターとしての私にとってもありがたい，貴重な経験であるはずだった。

そもそも「講義」というものは，ともすればこのような研究過程や個人的な経験を抜きにして，そこから得られた結果としての「学的知識」のみを受講生に切り売り伝授する場となりがちである。そして辛うじて前者に触れうるのは，教室ではなくコンパなどの酒の席となる，ということもしばしばだ。しかもこのような時に学生たちの見せる新鮮な驚きは，「先生も悩むひとなんだよなあ」というものである。それは論外としても，大教室に詰め込まれた今の彼らには，ひとりの人間が学問する過程，硬くいえば試行錯誤に基づく学的方法の確立過程というものを親しく学ぶ機会が与えられていないのだ。逆に先生がたからすれば，そんなことは甚だ格好悪いことかもしれない。そうそう貴重な手の内を見せられるか，ということかもしれない。しかしそれだからこそ，その「手の内・幕の内」が知りたい，学びたい。

このようなことを考えて，総合B科目「アジアを知る」は，科目枠としてはそのままながら，「アジアに学ぶ—日本とアジアと私」，ということに一応落ち着いた。イメージとして履修要項に書いた講義の「ねらい」は，結果として，次のようなことになった。

「[そもそも] 日本はアジアなのだろうか。アジアは日本とは別なのだろうか。日本がアジアなら，日本はどこまでどうアジアなのか。」

「『国際時代』などといわれている今日，なおわれわれの眼は欧米を向いており，アジアがその視野から抜けてしまいがちである。今われわれは，日本にある自分を知るためにも，アジアを知るばかりでなく，われわれの姿をこそ映す鏡としてのアジアに学び，そこからわれわれ自身を見つめ，そのあり方と進路を定めなければなるまい。こ

の講義では，実際にアジア社会のうちに身をおきつつ，常にアジアを問題の視野にいれて研究を進めておられる方々に，専門的知識の披露のみならず，問題提起型の講義をしていただく。」

講義の準備と展開

問題は，つきあってくださる先生がたをどうするか，忙しい先生がたにどのように頭をさげて依頼するか，という問題である。ただでさえ先生がたは，過重な授業負担に研究時間の方を割かざるをえず，時間と労力のやりくりに四苦八苦しておられるのが常である。大学教員とは本質的に教育者なのか研究者なのか，との議論は古くて陳腐なものかもしれないが，研究を教育にこそ活かすのだ，などという「正論」には，ことにお客様は神様である私立大学では，どことなくうさん臭いところがある。そうとすれば，テーマの重要性と全カリ総合Bの意義深さを説いたうえで，「余人をもって代えがたし」と説得するか，義理と人情で泣き落とすか，あるいは非常勤コマ不足に悩む当該学科の窮状につけこんで，かわりの非常勤コマを手当するから，とでも説得するしかない。つまり，ボランティアたることの強要である。しかし，強制されれば，もはやそれはボランティアシップではない。

正直言って私自身がこのような疑問や矛盾をかかえつつも，結果として，すばらしい先生がたに講義をお願いすることができた。しかし，常に複数の教員の出席のもと，という理想は，私が常にその場にいて司会をする，ということ以上にご迷惑をかけることに気が進まなかった。そのため私は，講義に対するコメントはもとより，ときにサクラとなって質問をし，学生諸君のうちから幸いにも手があがれば，マイクをもって教室中を走りまわった。

それはともかくとしても，各先生がたには，それぞれまず，①どういうことでアジア・日本とかかわることとなったか，②各自の研究・仕事の紹介と，それを通じて，今どうアジア・日本とかかわっているのかについて話をしていただくことにした。講義の概要は以下である。

まず荒野泰典教授（文・史，日本近世史）と小西による第1回のガイダンス・オリエンテーションに続き，広く南アジアを総体として捉えようとする私（文・史，考古学・民族学），近代トルコ史を中心に据えてイスラーム世界を追究する設楽國廣教授（文・史，東洋史），近世日本を世界のなかにとらえなおす作業を精力的に行なっている荒野教授の3人が，どうして，どのようないきさつでこのようなテーマにかかわるようになったか，そしてそこからどのような問題が明らかになってきたかを各人が2回ずつ講義した。

さらに日本にあって，アジア・ラオスとのかかわりを具体的に「ラオスの子供に絵本を送る会」を通じて追求しておられるチャンタソン・インタヴォン女史，またフイリピン農村研究の梅

原弘光教授（文・史，人文地理学）と，アジアをめぐるジャーナリズムに明るい服部孝章教授（社・社）をゲストとして，問題を深めていただいた。なお，最後には数名の学生諸君を含めた総合シンポジウムで問題を整理し，今後の問題深化につなごうとしたが，残念ながら技術的困難があって，必ずしもこれは期待通りにはいかなかった。

受講者たちの反応と問題点

一方，学生諸君からは，初回のアンケートのほか，各先生の講義終了時に小テストを兼ねるコメントを集め，それらをもって出席率と平常点の資料とした。また最終試験も単なる知識を問うものでなく，自主的・積極的にアジアに関する本を読むことを含めて，講義を各自がどう主体的に受け止めたかを問うレポート形式にしたが，これらのことが彼らにはかなりこたえたようである（毎回多量のテストやレポートを採点する当方にも，ひどくこたえた）。

すなわち受講登録者総数は225名と恐れていた通りの多数であったが，最終レポートを提出した者の数は147名，つまり35％がこの段階で脱落し，レポート提出者も22名（受験者総数の約15％）もが不可となった。とすれば，あわせて全登録者の75％にとって，この講義が意味をもたなかったことになる。ことに４年生の合格率は14％にすぎない。履修要項に「課題も多く自主的・積極的な参加が必須であるため，常時出席でき，意欲的な学生でないと単位修得は認められない」，と述べた通りの無惨な結果である。この数字はいかにも悲しいが，これによって彼らのうちにまだ残っていたかもしれない従来の侮蔑的な「パン教」意識が払拭され，また大学らしい学的水準が確保できるようになるならば，それは産みの苦しみともいえよう。

しかし，なかには問題を真摯にとらえ，それをアジアや日本社会のうちに現実的に活かそうとした，かつてアジアの国々に暮らしたことのある学生もいて，大いに意を強くした。このようなＳ・Ａクラスが17％を占めたことは，成功と自画自賛できることかもしない。また５人の講師陣による複数講義方式も概して評判がよく，さらに通年でやってほしいとか，もっと多くの先生が同席すべきだとか，こちらの事情をまったく無視した意見（実は正論）もあったが，それが可能となるには，むしろ大学側の配慮ある措置が要る。

ことに学生たちの感動を呼んだのが，切々と日本に生きる難しさと楽しさを具体的かつ率直に述べてくださったラオスのインタヴォン先生の話であった。しかしその謝礼が，１回の講義であればなんと１ヵ月分の非常勤講師給の４分の１，というのは非常識である（のちにそれは税込約1.3万円に「増額」）。ボランティア精神を学外の専門家の方にも強要しようというのなら，大学の見識を疑う。学生諸君にもうひとつ感銘を与えたのは荒野教授が見せてくだ

さった近世の韓国を扱った韓国製のテレビドラマであったが，それを通訳してくださった韓国からの留学生には謝礼もでなかったのだ。もうすこしまともな謝礼が用意できる公開講演会を組んで，それを聞くことを学生に義務づけることもできるが，それでは全学カリキュラムとしての体をなさない。

総じて，なんとも疲れる企画と運営であったが，少なくとも私には，先生がたの話から得るものは大きかった。しかし，大学にはもっと本気で，ことに大幅な予算措置を伴ったカリキュラム改革を考えてほしいし，学生諸君には大学生としての意識の大革新を計ってほしい。そうでなければ，それは教授陣自体の士気にも大きくかかわることになるだろう。

以上，「先生も悩む」ものであることをあらわにするためにも，言いたい放題のホンネを述べてきた。これでもって大学や学生諸君から「単位」がいただけるものかどうか，あまり期待はしていない。

(こにし　まさとし　本学文学部教授
1997年度総合Bコーディネーター)